

11 寛政九年『花供養』

底本 小林

校異 月明

## 花供養

(題簽 表紙)

(表紙見返し)

さきも残さず散もはじめぬけふ  
を其歳／＼に契り置て、翁の御  
像をあがめ、追福の法会を執  
せらるゝ。そが筵に近き国／＼は  
さらに帆づなよる紀の浦人がいと  
ま箴うつ越路おうなのわざにも

便り枝折をもとめつゝ捧げ

侍る句々を梓にのぼしてながく

ばせを詞堂の庫に納めしめ、

またわが輩にはさかゆく道の

かたじけなさをしめし玉ふ。めで度

双紙成りけらし。

伏水あし丸誌

(序一ウ)

百韻一順

世は花に道一筋の變化哉

蝶鳥多きおくの白雲

大名の隠者貴き春の日に

鼓もいつかうち破たり

置替る石の下より水涌て

玉苗配る千株百株

昼の月あるかなきかに雨をやみ

秋の乙鳥の皆軒をさる

百池

闌更

五牛

有隣

月峰

煤價

芦涯

白黛

あきなひも分て此季はひかす也

氏神まいり八里すゝめる

虹消て跡はまことに明き日ぞ

軍遁るゝ山と水とに

夢むすぶ袖に葎の匂ひ添

忘れし恋を人に問れつ

鳴連る鳥に曇る机先

ゆふべ世話しき械の音哉

濡たふさしぼる汐屋の折／＼に

棹雪

蘆丸

兔夕

俚尤

応美

南榮

破巾

芹水

木貞

くすりをしらぬ姉も妹も

白絹のふしを織にも名の高き

七野過れば秋風の吹

月の雲晴て林の下くらき

露ふみ分て疎遠訪ふ

悪太郎またなま中に菰は着ず

ふたゝびくみし桶砕たり

曙に帆をする鳥は何やらむ

ほそき煙の行急定めず

乙道

歌雄

都雀

斗流

由来

驢丹

子政

得終

翫雅

隣にもいまだ仏は持ざりき

牛解刀誰かかくしたる

道つかぬ雪一丈をとし暮る

信玄今に床を払はぬ

幾度か碁にほこる人来りけり

忘れはせじな鐘や落らん

ともし火の消んとしてはぱつと照

暈の算のあはぬがち也

想ふ恋ふくにも息の力なき

蘭子

不材

其白

幾久成

桃李

蕉雨

虎白

蔵撲

寄人



朝の月すむ名ぐわしの池

水芝

さま／＼の木の有庭の秋更て

兎角

いろ鳥小鳥何あさるらん

竿哨

枚方の煙の末の消かてに

其成

風呂敷ほどく旅の徒然

辰風

人間の五十六才すこやかに

米駒

又新田をひらく遠浅

菊後

右

句順従遅速

遠追は水の上なる桜かな

越後塩沢

牧之

梟の花にせはしき夕夜哉

、

里英

姿見に競負たりいと桜

、

北川

花に来て世話珍らしや仮世帯

、嶋 新田

以手紙

白鳩の一羽出て行桜哉

、目来田

里竹

白雲の庭にこぼれて夕桜

房州七浦

ト之

夕山や日はしんとして花の瀧

、

松隣

散さくら長き命と思ひけり

、

宗拱

花折て後に移る時計かな

肥前佐賀

清明

散花を都に贈る風もがな

芸州廣島

常曙

花のおく垣せぬ人の栖かな

上毛木島

紫陌

狩の備へ敷るゝ花の盛哉

豊後安岐谷

夢之

見帰れば親子舞なり夕桜

、

百壺

一本の花に世渡る茶店かな

、

花林

風はほし花には厭や帰り船

、

遊峰

散し見る心や花に狂ふ人

摂州住吉

杉光

影になりし梢も花の最中哉

甲州一丁田中

麻三

うへ向や花の日和の朝朗

、

方舟

酒くせや寝て花守の世話になる

芸州小方

可友

人老ぬ負れて出し門の花

武州熊谷

月樵

酒篋の花有門の出入かな

越中高岡蓬戸亭

壺仙

小雨して昼のさくらに寡鳥

、

花散て雲こそ移れ桜川

、

花咲や奈良静なる盧遮那仏

、

朧夜のおしてる花や難波寺

浪華

器友

山里は花の七日の月夜哉

自樂

鐘遠し花の辺の薄曇

長齋

石原の桜こたへてあらし哉

加州金沢

黎松

かつほ木や鋤石光る朝ざくら

上毛草津

鷺白

花の山時なし寺ぞこのましき

、

白英

夕榮や照あふ花の真白なる

、

涼眉

花に出て中直りたる男かな

、

夢菰

世の花に人も咲添ふ如く也

、

魚柵

よの中にうきは桜のさかり哉

相州猿ヶ島

丈水

五十年を心にもてり花一夜

、

半素

自ら月の被やいとざくら

、

苾山

月影にうこん桜を尋けり

武州勅使河原

快馬

思はずもやしきに入やさくら花

、

無塵

知る人にあふや花さく西東

伊丹

東瓦

水貫ふ隣は遠し山ざくら

加州

更々

雨晴や花ある里の朝朗

江州貝津

其月

しづけさや朧に匂ふ夜のはな

、

蘆丹

花守の文やとゞきて初桜

但馬

五雁

花遅き桜は常のあらし哉

江州万木

東嶺

我ために守にはあらし花の山

東武入間ノ里

観心

四方の花目にあまりたる峠哉

、

朝霧

遠近の鐘静なり花の時

、

川柳

此はなに狩なす人も浮世哉

、

大兆

雪折の片枝は淋し山桜

、

白羽

山寺の桜咲けり夕べ雨

、

喜久仙

をしや散る額に花のへばり付

、

桃栄

咲初し千もとの花に桜人

、

瑞宜

散ればこそ詠もふかき花の山

、

園蝶

実花や大名通る此あたり

、

麦袋

宮つこも三井寺諷ふ桜哉

浪花

素吼

風の音花のよすがのかたごゝろ

江州万木

北嶺

独来て独帰るや山ざくら

、加茂

堅山

花の雪煙の下を清めけり

筑前並木

布館

飲水を垂けり嵯峨の花の川

江州信楽

九岡

白雲の落ざま見たり花の山

、

一道

花散や日も闌に鐘霞

西湖万木

素更



花を踏人ちさく見ゆ東大寺

上毛島村

万戸

薄暮や桜に埋む鐘の声

紀州三鍋

九皋

夜桜に蠟燭売をとゞめけり

但州和田

蘭山

たちもどり手の花とはん茎長し

能州

破巾

からむしの布織軒や遅桜

飛州

東籬

中の二日有無のなか也花の中

但州

木姿

乱る花やかしこき世とは思へ共

越中東水橋

厥叟

うき我を世にあらせたる桜哉

勢州四日市

化蝶

分入て袖に物とふ桜かな

、守方

里朝

行あたる人なつかしやさくら狩

、 信州林

柳枝

鳶つかひ吹わかれけり花の空

、

風子

山ざくら駒は月毛の麓哉

、 飯田

里風

烟たゞよふ幕の春風

、

柳枝

姑射山へ入かよ花にうかれ人

、

柳枝

陽炎消る草にぬる蝶

、

里風

岡の桜雨夜に千鳥のぼりけり

羽州左沢

露橘

花の色や姥と名を呼桜しも

、

白賞

世わたりや占かた鬻花の陰

、

素風

梟や笑はれに出る花曇り

芸州能美島

雨丹

人しらぬ深山に在て桜哉

城南八幡

班狸

なめて見んさくらがもとの潦

、

自我

花もどり夕轟や渡月橋

阿州西分

羽角

床しけれ花守が身の夕心

奥南部行脚

一草

散ことのあるて桜もさくら也

浪華

蕪城

花見るや雲の上人世すて人

甲州三日市

一古

地の底の蟬見付たり遅桜

予州今張

卷玉

船玉に夷の国の桜かな

、

車南

賤の女といはれて花の主哉

、

古冬

葉ざくらや隣は今を遅ざくら

、

李風

桜生て硯売嵯峨の町家哉

、

卯七

日斜や鳥夫／＼を花に啼

江戸

松蘿

みよしのゝ花や十年二十年

播州小野

君中

でかしたり桜分行まよひ道

、国包

其跡

雁がねの帰る名残や花の客

、

沽節

折花は孫の手にあり山ざくら

肥前佐賀

春菓

山畑やさくら散こむ桔槔

能州竹之津

瀧の坊

花の頃留守の戸に迄匂ひ哉

甲州逸見

利躬

見返れば月の影さす桜哉

上州

雨翠

透し見る桜に二日月夜哉

、

木工

翌日ありと思へど惜しや夕桜

、

文和

夕日さす谷へ散行さくら哉

、田口

柳雪

短冊は桜の中のさくら哉

、前橋

香風

船とめん浦山さくら日の静

、

庭山

月の出て又見る夜の桜哉

、

李雪

眼うつりに辺の寂る桜かな

信州浅野

株甫

日は入て山又白しさくら狩

、

栗之

島山やさくら咲日の朝ぼらけ

上毛大原

青蒲

出不肖の必くもる桜かな

芸州広島

ふみへ

咲初て雲も八重たつ桜哉

江戸

一甫

人老ぬ今年も花の見事成

甲州暮地

琴水

花さくや何とせぬ身も暮惜き

肥前

頭華

帰りには枝折尋ん花の山

、佐賀

嘯風

日落てもしばしあかるき桜哉

遠州

幾久成

切株やのぼりてあそぶ山桜

但州

蘭山

人群る花も六日の野山哉

越中放生津

白老

嗚呼桜哉と感じて一句なし

讃州

如竹

桜／＼もえなん峰の入日哉

城南

魯長

桜咲て名馬ほしがる奈良法師

不木

有漏無漏の境はいかに散桜

讚州

吐鳥

河音や花に着せたき夜の衣

栗津義仲寺

重厚

こもりたき夜の桜や鞍馬寺

、

班鳩

又も花見よとて延し命かも

信州長瀬連月下坊

黒水

三人のたばね見にけり花の奥

、平松亭

有声

草の上にありたき物や散桜

、

不可

初ざくら咲や山部の村はづれ

、

草耳



木菟の眠りて寒し朝桜

、

斧山

夕日さす寺や桜の下あかり

、

鬼笑

雲と見る山迄つゞく桜哉

、

依山

散花を紙に包んで帰けり

、

白亀

さくら咲山を目当や渡し船

、

庭山

咲や此さくらの中の鐘青し

、

春翠

此あたり水白妙に花の雲

長州赤間関

花休

あけぼのをこぼるゝ花の匂ひ哉

、

仙梨

かたぐ日の花に埋みし人は誰ぞ

、

鶴翁

桜さく月の谷川夜明たり

、

嘉慶

花やさくら高根はづれし雲もなし

、

里山

眠なば花に荘子の夢もがな

水口

蜃州

あまつさへ花も見えけり淡路島

江州岩根

桂石

見ゆるもの皆いさぎよし花の山

甲州小沼

素蘭

さくら咲並木のおくや臼の音

、

婦川

桜咲て余所に名をうる片山家

、郡内

維清

花の山路桜狩とは覚束な

、暮地

隣車

船つけば岩間隠れの山ざくら

武州深谷

素山

居所も定めず花の飛鳥山

、

烏東

花に欲くれて淋しきもどり哉

、

秋好

花に来てうき世の外ぞ芳野山

、

如雷

旅人の笠に着て来る雨の花

、

羅門

君来ぬと桜の中の枝折かな

能州

五雲

見上たる山は桜のとぼそ哉

、

好古

ほの／＼と浅黄桜の朝日哉

羽坂

文士

道／＼や花の葉に鳥の啼

勢州雲出

菊羽

蝕ばれて桜をちらす夕日哉

東武行脚

花縣

手をうてば夕鳥花にさはぐ也

勢州津

方鳥

ふいと来て桜にあそぶ夕哉

、

轍左

鳥は音のよくもかれざるぞ花曇

、内宮

右竹

鶏の音に思ひ明すや花日和

豊前田川

蘭丈

溪路や花ものいはず新しき

上毛西牧

白質

居ながらに老の花見や千里鏡

、

春呂

花盗みあれば母へと申けり

、

長左

世の中や花に心の水かゞみ

、

阿石

雨祈る神もましませ花盛

、

龍山

さくら咲ころの松風色みたり

遠州浜松

白輅

咲初る花に風吹夕かな

、木舟

雪桃

在明や四五軒ならぬ花の庵

加州金沢

春睡

果しなき世とは思へどはつ桜

、

眠和

それ鞠のしばしみへけり花の中

、

魚支

鯨寄る浦もさくらの旭かな

、

車大

挑灯の古めく花の戻り哉

越中

白木

あこがれて花見世帯の奈良の里

、

如龍

花に出て気はしかうなる女哉

、野寺村

埴鳳

新敷斧の跡ありはつざくら

、

此君

在明や朧の花にかしこまり

、北野

孤柳

うるはしく花の明りや幕の内

、小杉

飲河

夕月の西照る花の木の間哉

、エビエ邑

枝鳩

池の桜散るは空なるさくら哉

、

大西

花を照日洩てうれし吾が齡

浪花

尺艾

響すな花の辺の薪伐

加州

馬仏

三歳の背くらべ桜咲にけり

江州堅田

顕雄

里／＼はみな留守もりの桜哉

芸州竹原

大椿

初老の春

詠入て花にまどはぬ心かな

越前敦賀

五冊

花の山嘶く馬のふもと哉

大坂

遅竹

霞の中を通ふ鐘の音

長齋

爐をふさぐ比は茶臼に眠るらん

英

おもしろい名の手紙来る也

竹

座蒲団をはこぶ小船に八日月

齋

芦とすすきに露の玉散

英

谷／＼の雲のしらみや夕桜

浪花

禎祥

嗚呼さくら草は廿日もある物を

遠州久喜賀浦

演之



花ざかり花に寝顔の乞食哉

、

業甫

粟飯に腹は肥たりかばざくら

、

玉尾

大木に名高き寺のさくら哉

、

雄之

酒まいらせん桜がもとに眠る人

、

和吹

咲満て花に隠るゝ深山かな

上毛樋越

素栄

吹折れし桜咲けり春の末

、鼻毛石

米器

月ひとつ住残りけりゆふ桜

、東箱田

米鼠

柴売の迎ひに來たり山桜

、

米丘

風もなく散氣の付し桜哉

、荒口

米充

山賤にいざこと問んさくら狩

、横室

三笑

朝桜浅黄はものゝなつかしき

、上ノ宮

羅仏

雨晴や結んで落る花の露

、猫村

晶角

一面に花の日和の静かな

、相生

素陰

さくら咲けふや則天赦日

、

鷺川

寝る時に草臥出たり花戻り

、

得牛

敷島の行道ひろし花の山

、まやはし

宗応

折て来ぬ花に女房の怨み哉

、

麦四

飲尽てゆふべを花にぬる人か

素太

あしたには雲と成てふ花恋し

、木兔庵

米砂

中／＼にまどへる花のまくら哉

浪花

了江

寺深し桜散夜の月曇る

讚州白鳥

灌圃

散かゝる花にひゞくや辻芝居

勢州部田

梅二坊

花の風箔の小袖の上をふく

浪華

魯隱

吹よせて音せぬ浪やちる桜

、

浅生

夢に見てふたゝび花のさかり哉

能州富木

蚊几

不可及其愚

花の陰さすがに馬鹿と成にくし

筑前若松

可十

郷見れば日は落かたや花の山

、

文亢

月に除今は桜の枝ほしき

、

方云

衣そゝぐ花の流れの里床し

、

有之

花の集見た夜は大和巡りけり

、本木

樗葉

花曇り近よればよき日の目有

、

文左

花に叫ぶは翁やひとり朝ぼらけ

、福岡

競巴

花の人尋て花に迷はされ

左々

散浮る花に干潟の嵐哉

蘭夕

花の友同じ心や顔も似て

佩霞

おく山の花に功者よ京の人

左史

歌仙

初ざくら誰が枝せし去年の山

越中放生津

二翼

齒朶の古葉にすべる赤土

大西

蜆汁別野にかよふ給仕して

白老

なか荊かくす丸額がみ

翼

昼の月牛打鞭に草のつる

声さま／＼の虫や飛かふ

城跡の秋冷じき堀の水

まつり日知れぬ小祠の神

みつ輪組手めでたしと座を譲

亥の子の夕霰ふり出し

何となう契し事も疑はれ

頑に見る井手の下紐

窓の秋打込風の徒然に

西 老 翼 西 老 翼 西 老 翼

桂の雁のうつる月影

なぐさめも長き夜すがの船の上

御傍女中の酌とりにたち

植まぜに花と柳のからにしき

燕の巣くふ新羅漢堂

右下略

明日からは人も訪ばやはつ桜

越中放生津

九阜

見歩行ば人の桜はなかりけり

甲州藤田連

可都里

花ざかりついと出てくる都かな

漢浦

花咲て我にひと癖付にけり

作良

散花をうけて溶る心かな

不求

見事なり又おしげにも桜ちる

序明

夜桜や一雨しのぐ尻畳

柴馬

花の夢峰迄登る寝汗哉

鏡平

花咲て雇人おかし麓坊

、  
三ノ条

歌薙

見所は日の裏にあり遅ざくら

三紙

月夜ほどよし野桜のしらみ哉

、  
山ノ神

保久二



やどり木の桜さくらにやどりけり

、

鳥澄

心あるか門の桜に夜の人

、

柴蘿

咲花に心の望うせにけり

、

佰洞

朝山や雉子追立てさくら狩

、鍛冶軒居

富久

桜過て眠れど花見心かな

、

呑鳥

朝戸出や君が行方は花ばかり

、市川

鱒魚

分別も捨て出けり花の友

、布施

東麻

酒さめて夕桜とはなりにけり

、浅原

六珈

花守や花あるうちの拾ひ物

雄生

こんもりと月夜桜の更にけり

松声

夜桜ややすく更行松の月

真弓

朝ざくら東へ向かぬ顔もなし

真洞

朝ざくらさすがに障る物もなし

捨来

蝶追ふて童につるゝ桜かな

八矢

ゆふ月や騎射の嵐に桜ちる

旭山

花景の浮島松や柏かげ

如泉

上州横尾

越中高丘

越前丸岡

東部

鐘は霞て浪はさら／＼

杜若

紙鳶老と児との道すから

茶暉

篠葉草根に風は落たり

泉

月さへて猫の鳴行里あらし

若

器氷りて豆腐ひく比

暉

雲と咲雪に似て散桜哉

伊賀上野

未塵

花咲て三日は空をあんじけり

芸州竹原女

舌向

雨の日や花に飢たる人の顔

嵯峨

峨乙

夜桜や菰きた僧の物がたり

阿波

如陰

きぬ／＼や桜に雲のはなれ際

丹州龜山

金瓦

竹馬の鞭打つれて花見哉

、女

芝蘭

水白し花に曇れる人の声

筑前

君花

惜しやかゝる花に人なし朝朗

奥州仙台

福二

ほのめくやとぎれ／＼に遅桜

、

城山

散る迄も見からす花の主かな

、

梅窓

ちる花や風なく見せる花の奥

、

古柳

花の世を我もの顔や林守

、

弾子

分のぼる六部の鉦や花の山

、

東流

古道は覚束なくも桜かな

、

五渡

朝船の遠山ざくらうごく也

江東八幡山

柏翠

散花に昔しのぶや小町塚

、

紫石

昼中は人に動かん山ざくら

、

芳志

雨中惜花

月は雲に隠れもするを雨の花

龍城内三黄亭

李喬

ちる桜筏守家の水の味

三州池鯉鮒

祖風

谷川や水は濁りて花の陰

越氷見

南玉

月影の更て見付し花の露

、

祐之

鶯を尋てゆけばはつ桜

、

春潮

柴の戸や花の香を吹七ツ崎

、

魯仙

山ざくら我より先に人の音

、

蛙水

花七日石に雉子鳴朝ぼらけ

、

水明

軒の曇遠山桜咲ぬらん

、

馬十

カタ 堅神といへる里にて

春もまだ過かた神や遅桜

志州烏城

蒼梧

桜散陰を神輿の鏡かな

上毛亀丘

笑魚

生船に花散城の出崎かな

、世良田

免月

馬乗らぬ坂に篠家の遅桜

、

志塩

花に来て嚏おかしき昼間哉

、尾島

官橋

鐘遠く日をかゝへたる露桜

、亀丘

杵臼

暮をしと跡じさりする桜かな

出雲

蔵樸

曙に水汲花のふもと哉

、

蕉雨

夜桜やはたち若くば反吐踏ん

丹波梶原

洞々

花越て誰やら呼し我名哉

、牛河内

東畦

一昨日の雨光りけりはつ桜

、上田

暮来

往し花に白眼之助と申けり

、黒井

大梧

散花に長き思ひの恥かし

加州金沢

周馬

長閑さや花にほたへる牛の声

、

巴州

酔醒の見る物にせん散桜

河内郡づ

古光

古されし誰が塚なるぞ花の下

、

蘆風

此はなにうき世を捨し庵主哉

、

如水

入相に耳ふたぎけり山ざくら

、

如竹



默然と子をふところに花見哉

、村野

淡水

人絶ぬ花よさくらに東山

、

竹里

散花にまぎれて蝶の狂ひけり

、私市

由之

うか／＼と星の桜になりけり

、

卜子

詠入る瀧に音なし山桜

、私部

友光

雲と見し花下にある九折

、

里山

花むしろ地に曙の鳥が啼

浪花

友国

瀧のほとりの春ぞつめたき

長斎

籟のけふは西より霞来て

ふくろの中の珠みがく也

竹の葉に露もこぼさぬ月なれや

たななし船に初潮を汲

とろけんとする心哉桜かな

分のぼる桜が中の煙かな

軒の花灯ともし比の人の声

狼藉の花見たしけり薪伐

、 国 、

執筆

城南天神森

五牛

江州朽木

南嶺

上毛下仁田

暁鳥

長州厚狭

梅扉

待花や西風渡る宵の月

肥前有田

波声

燈のさくらにもるや奥の院

、

雪卮

初桜笠も此日と着初けり

、島原

陀雲

桜咲や山／＼くれて焚篝

、

白狼

花は枝に人声は山に満日哉

、

一睡

人はいさ我にふれ／＼花の雪

、

董里

花の蜂折とる人を追にけり

、神代

仙鳥

嗚呼桜見る／＼風に仕舞けり

、

呂柏

古城のさくらに昔語りけり

、

齋我

花守に羽織たまはる国司哉

代官の花見制して花見哉

花に心借る宵や雨曇り

散花に睡りし牛の涎かな

花に酌酒や客なし主なし

世の中に何事かある花盛

路守に白銀くれつ花の人

夷等が肉ぶとりけり島の花

やどり木の花見てこれも桜哉

、

、

、

、

、

、

、

芳洲

魯盞

梨水

兔丈

完雅

、

春喬

、

如蘭

越後荒井

ちる花と共に大井の水も行

肥後熊本

亀令

酔る花のあく迄床し芳野山

長浜

翅月

花の雲牛鳴車やどりかな

江州彦根

水石

何事に出るも花見けしき哉

行脚

石蘭

花に出て人近き人と呼ばれけり

筑前蘆屋

希玉

花と月清めば昔がたりかな

、

白志

夜桜や人間に富貴鳥貧し

浪花

一炊庵

片枝に吹矢の跡や山ざくら

、

亀丈

六歳ぶり嵐もあらず桜哉

江州江頭

籬庵

夜ざくらや草に酒ふく白拍子

越前敦賀

沢雉

花に付し毛虫を憎む翁哉

甲州暮地

隣車

諷ふ声花に沈むや日の曇

肥前平戸

魚翁

花の香や露の下闇明初す

江戸

完来

いにしへよ今よ桜の散寒み

、

午心

初ざくら今年命の手際哉

浪花

大江丸

いつとなく浪に開くや磯桜

日向美々津

吟龍

花を見る乞食や昔何の果

越前敦賀

松琴

花に寝て狐の姿見付たり

江州石部

亀渕

待をしむ花の心の老もどす

東都

宗讚

門の花さいて主の留守七日

、

百恐

夕闇や花散あとの梢より

江州平松

亜溪

黛のみだれめだちぬ花の陰

、女

志宇

又雲にわれいざなふか山

奥津軽

五英

白雲に雲たつ雨の桜哉

浪花

如流

初花やゆふべの雨のぬくみより

、

詩舳

大原女の袷ははやし初桜

玉房

口あいた人ばかり也花の山

梅邦

御園より薄茶召けり夕桜

蘓雄

羽根つよく蝶狂ひけり遅桜

能州黒島

玦卜

天の戸やさくらに曇る鳥の声

、

玻井

夜桜に奥の見へすく揚家哉

、

柳汀

蝶鳥に梢の花のちる日哉

、

布遊

夜鴉の花におぼれてや鳴迫る

、錦川

玉史

二夜庵百韻一順

朝／＼の飯よう焚て花盛

東都

貞松



南曇に暮るゝ二月

鉄壳濡紙きざむ陽炎に

十人ばかり袖つらね行

置露の宵寝の雀寝飽らん

一本竹に影さゝぬ月

芝栗も短冊板も浮潮ぞ

声がんばりし秋の野男

弁への四十の色香捨かねて

うらみつのりし折紙の文

松月

白慶

金翠

紗言

百道

自閑

浙江

椿羅

風化

庫裡口につゝみ開けば昼下る

寸蘿

こぶらがへりに空蟬を踏

岐暁

里人の横たえたがる長こしり

微曰

軍かましく櫃に蓋する

曲阿

薄様に草山集を書つゞめ

和養

胸に杖して途に煩ふ

理玉

黒蛇のはゝ木隠れも怖しや

五風

彼岸七日をつふに降たり

恵中

風雲のしらみがちにも月は行

嘉菊

老には過し四里の山間

太麻

雨の花人なつかしくねまりつゝ

梅人

後れやうじのまだらひしくひ

普撰

竿舟の小くらに凧の尾をたぐり

梅甫

膝したゝるく君に泣るゝ

五計

消る火に手のたゝかれぬしのばしさ

寸龍

杉をうしろの雪の小城下

素交

比巴紙たがへて馬をまくり下り

成美

黄昏空の豆腐戴く

寸来

雷のなれば物くふ癖ありて

佃屋敷は敏う放しける

梓木に合歡の眠や移るらん

今煮鯉に筧しかけし

祭酒大垣衣のまめやかに

木戸打比を鑓ふらす月

稲はさの陰行堰さら／＼と

鳴あみ持てのらの名を取

いてたりも女郎のたはる店借て

真越

菅枝

芝父

文考

弼水

菊明

憶梓丸

江風

雉鳴

錦帯橋を壁に詠る

筆

初ざくら種芋選ぶ日和哉

相州長井

吳雪

近よれば瀧の音あり花の虻

下総水海道

文考

花満て柴灯のしらみけり

奥州津軽

春潮

散かゝる桜に蛛の吹れける

桃仙

火ともせば花色／＼にみゆる哉

五竹

家はづれや桜戻りの潰れ声

玉之

花の暮鐘は清水鳥は北

、岩城平

幾重

行方を香にさそはれて花の山

露帆

捨杭に鳶のとまるや花日和

沾里

夜ざくらや催馬楽諷ふ都人

水風

旦松

花に寝て門逐るゝは乞食哉

武蔵

金翠

妻もある花の中なる一ツ家

江戸

紗言

酔人の噂やはなの五六日

越中

楚口

都氣にうつろはぬ間や初桜

甲州飯野

真貫

折あらず花盗人も夜は来ず

、

梅五

情ふかし花のうしろの小宴

、  
静良

嶺こせばまたなつかしゝ里の花

、  
平岡

、  
如雪

あだ雲の外は山みな山ざくら

、

、  
龍笛

けふも来てうき世忘れの桜哉

、

、  
和水

晦日まで通ひつめたる桜かな

、

、  
孔阜

遠里の花折添し旅籠哉

、

、  
和石

ある人の月にふれ来る桜哉

、  
小笠原

、  
都良雄

人心花にとどかで散日かな

、

、  
静夢

醜きは人にこそあれ花千本

、  
勢州山田

、  
晴山

散浮し源介橋の花いかだ

筑前木屋瀬

木耳

駕にのる奢もにくし桜狩

奥州仙台連

露仙

けふはまた姫にねだられて山桜

露角

おもひきや傾城つれて桜とは

俄角

さく花に賤がさむしろけふも借

和睡

桜川嵐ののちの名成べし

右魚

うつろふや花諸共に眼かれせず

竹和

夕栄や桜の山の朧雲

、女

仙紫



池清し桜の上を魚狂ふ

、

閑和

山口や花になり行よるの雨

、

白鯉

龍燈のそれに隠るゝさくら哉

、

雪香

あかぬ色と君もの給ふ桜かな

江州大津

升子

散桜人しづまりて帰けり

勢州山田木枯庵

丘馬

ともすれば曇るを花の心哉

、

四溪

待わびて見尽さぬ内に散桜

、

百花

夜はすでに人よりしらむ花の山

、

似蓉

舞はうたひ或は眠り花の山

、梅月庵

坡仄

石置て流れ越し行花見哉

、女

幸

譲るべき座を奪るゝ花見哉

、

桑戸

山ざくら年木にもれて盛かな

、

不及

花ざかり忍てもないの日和哉

、一斗庵

逸漁

夕されば松のひまもるさくら哉

、

東河

用のある往来に馬場の花見哉

、

双石

瀧の音の名こそ残して咲さくら

備後布埜

ふもと

鮎はまだ小鮎成けり花ざかり

、

魚一

花守に明松かりて戻りけり

、三泐

楚雲

きのふまであだに暮して散桜

防州室津

仙家

しらぬ鳥のかず／＼鳴や花の山

、

埋木

竈へる野陳の路や遅ざくら

、

石父

鴛鴦に流れかゝるや花いかだ

、女

と美

躋る山みな花のさかり哉

、

鯨牙

うつとしい曇には似ず花の山

、佐賀

東溪

山里や花にしるよし十二日

浪花

画涼

花五日腹わたに散心かな

筑前木駅

ともを

明がたや風なき岡の散さくら

、芦屋

なくら

水白し花に曇れる人の声

、直方

君花

人群る花の六日の野山哉

越中放生津

白老

花見るや雲の上人世捨人

甲州三日市

一古

花に嵐散うく水もとゞまらず

下毛枋木

尺樹

花の欲山迄ほしく成にけり

、

芥舟

紙漉るよしのゝ里や初ざくら

、

橘人

花に明花に暮しつ奈良法師

、

淡交

すごく／＼と酒のむ花の留守居哉

、

燈居

散やさくら水打庭の物あはれ

、

桃葉

うとく／＼と杉のみくらし花の山

、内西方

不玉

鶯や疊に暮る児二人

奥津軽

富之

折添て桜ちらすな刀もち

、

五嵐

ほととぎす鳴や桜の葉の茂り

、

梅中

朝さへや鹿の背をかく岡の松

、

凡鳥

白削る雪の夕の扉かな

、

梅成

閑さや閑の桜に鳥下りる

能登二階首曉改

五井

おく山や人まつ色の遅ざくら

セリ川

昇山

くれてゆく庭を桜の月夜哉

備後府中

可卜

誰やこの浮世の花に編木する

防州山口

湖流

曇来る空を花まつ便哉

、

四教

さくら木にいやます花の光かな

、

河丁

撞や鐘花の夜すがら月の澄

、

流志

風しぶく曉憂しな花の夢

、  
舍州

表八句

さくら戸や散日をうしとさし側め

越中高丘

白雪

田螺耳なれ見なれ縣居

東吳

鋤を曳中に千里の駒を侘て

魯長

杓もてしいる半切の酒

荊花

大紋に檜の臭からき木工の助

吳

頂ちづめる比良の根をろし

雪

かゞり船月遅き夜の覺束な

花

蘆火の飯の穂わた交りに

長

右下略

花に寄れば麓の家の近劣り

大旗

桜咲て世に余さるゝ碁打哉

魯長

静さや花散里の火縄店

東呉

みやづかひ花に二日の隙もかな

鳥籟

百年も遊ばんさまや花の蝶

北海

花の雲はづれにかはら庇哉

白揚

深く香をつゝむ心か山ざくら

里秀



朝付日うるみぬけたり雨後の花

、

魯丁

杳音に人がらしるし庭の花

、堀岡

呑牛

咲花に懐旧の情の発りけり

西肥諫早

孤石

敷浪や磯山ざくらちりかゝる

、

雨夕

花の雫硯の水となす日哉

、

芳笠

邯鄲の枕と花をしきね哉

、

都友

花の狂阿蘭陀酒に人や酔

、

榎路

遠騎の裾野に暮る桜哉

、

輝白

あけぼのや花のまに／＼雲動く

文塘

夕鴉啼や真白き山ざくら

紅良

狩人の起ふし安し山桜

瀧吹

此頃は桜に奢る山家哉

肥前島原

几睡

雲分て稀人去れりゆふ桜

常州水府

真向

賑ひやさくらが中の緋毛（毛賈）

筑前福岡

蘭亭

花一木其のち桜咲にけり

東都臨海主人

春蟻

此花に誰が夢見しぞ枕紙

在朝鮮

孚瀨

山桜ちるかかなしいか呼子鳥

奥州

冥々

我心なやめる雨の桜かな

江西浦

嗟雀

雨の桜衣しほれば匂ひけり

江戸

蘆錐

桜見や友選ぶ間の朝曇り

信州善光寺

柳莊

岡の花人にも春をいそがする

、

杜厚

茶のかてに木の実出しけり花の宿

、

凡化

初ざくら柳の春を離たり

、

如嵐

山ざくらかごとがましく月に散

、

文兆

うちつれて花の迎に出かけたり

、

希玄

まつ風はあちらの谷や山桜

浪花

柏庭

世はかくぞ花に寝転ぶ借り蒲団

播州龍野

十洲

うち見やる桜は明し雨の人

上毛？崎

朔宇

十徳の人の世界や花の陰

、

以貫

雨恋し蒼桜に日の斜

、

玉支

暮を散花よ女の長羽織

、

宇明

夕栄や乙鳥のくゞる花の波

、安中

夢中齋

花ざかり昼も月夜も休かな

求我

花に終見ほれ／＼て俄雨

、中宿

佐保

うつり行花の下水影澄ぬ

加州

石堂

夕されば漸静まりぬ花の声

伏水

あし丸

野々宮や桜にひくき朝の月

、

金兔

山ざくら女の酔も憎からず

、

錦圃

さくらのみ風吹やうに思ひけり

、

榎價

花散すもの見付たり鳥の声

信州

岷山

物がたき人や桜に片苗字

奥州一ノ関

扣角

心こゝにありて敷るゝ桜かな

豊前

有隣

花のため人の肥たる弥生哉

驢丹

鶯は何処へなぐれて雨の花

月峰

八丁の道廻りけり山ざくら

芦涯

朝和やつもる共なき花の色

棹雪

夕桜露にまがへて暮にけり

唇風

花もるや花過し人の閑なる

五六

巡りあふ都の花や双林寺

花最中囀ん鳥は寝にも来ず

風情そる花にむかへば月匂ふ

妙なるや月に移れる花の色

月の桜や一羽鳥のうかれ声

花七日中に雨は嵐あり

常の人うかれの人や花の道

花にうかるゝ我に表太が魂や入し

呼ついでくれを下るや桜狩

水芝

虎白

木貞

兔夕

兔角

其白

都水

南来

松琶

衰へぬ花より風のふく日哉

米駒

初ざくら嘘いふ人に出会たり

不才

花まてる流れきのふに似ざる哉

竿哨

散と咲中の二日を花供養

其成

はつ桜隣もあれどかけ巡る

芹水

花の雲見る我上はさくら散

南栄

花の庭匂ふや鳥の声迄も

東適

折／＼や花に隠るゝ人の声

黒樹



蕨買て案内させばや山桜

花に眠り月に驚く夕哉

庭ざくら見る事まれに主ぶり

花あればこそ鳥も鳴人も笑へ

咲満て中／＼花の朧哉

眼澄てあけぼのゝ花寒かりき

月となりて鳥眼覚しぬ花の山

見とゞめて居れば曇れり遠桜

菊後

翫雅

二雷

寒蓼

樗山

杜桂

俚尤

甫尺

尼

朝ぼらけ初て花を遠目哉

折といふ手に散もうし山桜

春十日仏めでたし花の寺

折／＼は花もつれけりいと桜

灯うつりや花に動ん夜の蝶

花さかば告よ鞍馬の石運び

眼を閉て心の花を見る日哉

谷間の水音凄し夕ざくら

花曇風はむ鳥の過けり

白黛

桃李

左律

竹風

蘇江

龍美

蘭子

得終

応美

桜みな露と成けり山かづら

丈左

酔機嫌花にまぶれて歩けり

嘯山

磯山や春を忘れぬ遅ざくら

閑空

我も歌に詠入られつさくら人

斗雪

花曇袷着て居るひとり哉

青鯉

遠近も花によるべの蝶よ鳥よ

都雀

あけぼのや浅黄桜の空に移り

長道

雨はれて花心よき二十日かな

恋にかへし桜に暮の嵐哉

わりなしや茎ながく散雨の花

夜ざくらや花の後の人の顔

遅ざくら一木がもとの雪吹哉

花に暮て山松の戸を潜る哉

花の雲天津桜と見やりけり

花さそふ水の上にも盛かな

土卵

松蒼

可董

草美

柏嶺

百々丞

乙道

闌更

鉢叩

洛東 芭蕉堂藏板

(裏表紙見返し)

(裏表紙)